



第1章
戦後開拓写真調査ノート
— 東北を中心に

高橋 しげみ
(青森県立美術館)

一 調査のねらい

一九四〇（昭和一五）年から一九六六（昭和四一）年にかけて九度にわたり青森県下北半島を訪れた民俗学者の宮本常一は、その調査の成果をまとめた著書『私の日本地図 3 下北半島』（同友館一九六七）の中で、一九六三年（昭和三八）年、青森県下北半島西部に位置する戦後の開拓村、野平を訪れた時の印象を次のように語っている。

私は多くの開拓地を見てあるいた。しかしその中でかがかしい成功をおさめているものは少ない。はじめから成功のおぼつかないようなところへ入植させ指導も援助もお粗末をきわめたものであった。そして重い責任だけを負わせた。入植のために、その人生を無駄にした者は少なくない。野平もまたあえぎつづけている開拓地である¹。

樺太引揚者と山形県出身の満州義勇軍が主体となった満州引揚者の二グループで構成された入植者一団によって、野平が農耕地として本格的に利用されるのは、一九四七（昭和二二）年のことであった。宮本が調査に訪れたのは、それから一六年ほど経過した時期で、初期に支給されていた開墾補助金が打ち切られ、現金収入を頼っていた製炭のための材木も切り尽くし、まさに貧困に「あえぎつづけて」いた頃であった²。痩せこけた牛のいる荒れた牧草地や台所さえ整っていない貧しい家屋など、野平の苦況を目の当たりにした宮本の嘆息が聞こえるようなこの言葉は、第二次世界大戦後、日本国内の山野に唐突に生み出されていった多くの開拓地の状況を言い得ている。

第二次世界大戦で大敗を喫した日本は、戦後、膨大な数の戦災者、復員者、海外引揚者、失業者を抱えることになった。これらの人々の救済と、戦災による農村の荒廃がもたらした食糧難を克服する国家事業として打ち出されたのが、昭和二〇年一月九日に閣議決定された「緊急開拓事業実施要領」であった。これを受けて約一五四万ヘクタールの耕地造成と一〇〇万戸の入植者を目標に、国家的事業としての開拓が全国一斉に始められた³。

青森県も、五年間に六七〇〇戸の入植と約四万ヘクタールの開墾を行う計画を立て、広く入植者を募った。東北最大の被害を出した青森空襲の戦災者や樺太からの引揚者を中心とした県出身者もさることながら、山形県、宮城県、長野県、東京など、県外からの入植者も多数応募し、岩木山麓、八甲田山麓、そして下北半島など県下全域にわたって、短期間に多くの開拓村が出現した。

本稿で取り上げられるのは、そうした第二次世界大戦後に国策として展開された開拓事業の実践の場となった土地で撮影された「開拓写真」である。「開拓写真」という言葉は、日本の歴史の中で多くの場合、明治期の「北海道開拓写真」との関連で現れる。「北海道開拓写真」は近代日本における内的植民地の開拓事業の経過を記録した最初の写真群として、歴史、社会史、写真史といった様々な文脈に位置づけられ語られてきた。とりわけ戦後の日本写真史においては、一九六八年に日本写真家協会の主催で開催された「写真一〇〇年——日本人による写真表現の歴史展」⁴の準備段階で写真史の編纂に携わった者たち、なかでも北海道写真を含むパートを担当した写真家の内藤止敏によって「発見」されて以来⁵、その「記録」に徹する撮影の姿勢が、「表現」としての芸術写真を批判的に語る際の対極にある理想像と位置付けられ高く評価されてきた。

一方で、戦後の「緊急開拓事業」に連なるあらたな開拓事業の写真に関しては、当時盛んだったリアリズム写真運動の枠内での個別の評価に留まり、戦後の「開拓写真」総体として俯瞰的に捉えた時に浮かび上がる社会的、歴史的意義を考慮に入れた多角的な考察の対象にはなってこなかった。このことは開拓の営為そのものが、「北海道開拓」であれ「満州開拓」であれ、明治から第二次世界大戦終結までの日本の近代化の過程の中にのみ存在したかのような印象を与える事態を招いているように見える。その背景には、冒頭の宮本常一の言葉が示すように、戦後の開拓地には、その過酷な自然条件ゆえに生活を成り立たせるのが困難で早々に離散、解消に追い込まれたものも少なくなかったことがあるだろう。それだからこそ、たとえ短期間であっても国策に従って新天地に根づこうと試みた人々の痕跡を留めた写真は、その見えにくさゆえに無かったことにされがちな戦後開拓事業の証左として、「作品」という価値を超えて、考察を加えるべき余地を多分に残しているのではないか。ここでは筆者がフィールドとする青森県に残る戦後開拓写真の二つの事例を主に検証する。

二 小島一郎（一九二四—一九六四）のヌラ平開拓写真

一九二四（大正一三）年、青森市大町（現本町）に玩具と写真材料を扱う商店の長男として生まれた小島一郎は、青森県立商業学校（現青森県立青森商業高等学校）を卒業後、出征。復員後、戦後の混乱期を経て、一九五四（昭和二九）年頃から本格的に写真を始めた。父親の小島平八郎は写真材料店を営む傍ら自らもカメラを手にし、青森県アマチュア写真界の草分けとして活躍した人物で、小島はその父が一九二二（大正一一）年に創始した青森で最も古いアマチュア写真グループの一つ「北陽会」に

属し、アマチュア写真家として腕を磨きながら、徐々に頭角を現していった。日本の報道写真の先駆者・名取洋之助は小島の才能を早くから認め、自らもその実現に一役買った小島の東京での初個展「津軽」（一九五八年）のリーフレットに、「平凡な対象から非凡なものを見出す目と、平凡なアングルによって強い写真を撮る腕とを持っています。」と新進気鋭の写真家の実力を称える言葉を寄せている。

土門拳が一九五〇年、「カメラとモチーフの直結」と「絶対非演出の絶対スナップ」を原則に提唱した「リアリズム写真運動」は、小島が写真家としての活動を始める一九五四年頃には、「第一期リアリズム終焉宣言」とともに以前の訴求力を失いつつあったが、地方のアマチュア写真家たちは、いったん叩き込まれたリアリズムの理念からなかなか抜け出すことができていた。リアリズム写真の強い影響下にあるそうした周囲の写真家たちと同様、被写体の選択においては青森という地方の風景に徹底したこだわりを見せた小島であるが、他方では「構成派」の淵上白陽に師事した平八郎の影響もあつてか、リアリズム写真とは一線を画す「造型美」⁷の探求に大きなエネルギーを注いだ。逆光の空からドラマチックな陰影を炙り出すべく、覆い焼きの技法で焼き込まれた津軽の秋の田の夕暮れの光景【図1】、下北半島の荒々しい冬の印象を基に、複写のプロセスを大胆に採り入れて生み出した激しい白黒のコントラストによる厳寒の雪景【図2】など、郷土、青森に生きる人々への深い共感を、暗室での技法を駆使しながら印画紙に



図1 小島一郎 つがる市木造
1958年 青森県立美術館蔵

圧着したような濃密な情動を湛えた写真の数々が、約一〇年という短い写真家生命の中で生み出されていった。

こうした暗室技巧の創意工夫によって写真を作り上げていった小島にとって、撮影済みのフィルムの中から適当なカットを選び出すには、密着焼きでは用をなさず、ある程度の焼き込み作業が許される最低限の大きさにまで引き伸ばして見る必要があった。その結果、小島は生前の活動の中で、試し焼きあるいは焼き加減の見本の意味を持った膨大な量の名刺判前後のサイズのプリントを生み出すことになった。一九六一年に上京してから小島は、フリーのカメラマンとして活動を始めるにあたって、写真雑誌の編集者などへのプレゼンテーションのために、この小さなプリントにネガと一致させるための番号をふり

ながら、粗末な台紙に貼り付けた一種のアルバムを制作している。三〇〇葉以上に及ぶそのアルバムの中に、「ぬら平」という見出しと、一九五九年九月の撮影時期を意味する「1959・9」という数字が書き込まれた四点の台紙が含まれている【図3-6】。その各台紙には、長辺五二mm、短辺三五mmの小さなプリントが二〇〜二七枚、台紙四点の合計で九八枚貼り付けられている。

ヌラ平と呼ばれた八甲田山麓のその集落は酸ヶ湯から下湯温泉に至る中間、現在の青森市荒川寒水沢地区に含まれる標高六〇〇メートルの場所にあった。戦災者、海外引揚者、失業者救済の国策として行



図2 小島一郎 《疾走》 下北地方
1961年頃 青森県立美術館蔵



図3



図4



図 5



図 6

なわれた緊急開拓事業の中で開拓地に定められたこの集落に入植が行なわれたのは、一九五三（昭和二八）年九月。満州からの引揚者を中心に、青森県出身者に加え、新潟県、栃木県、長野県など県外出身者を多く含む二二戸が暮らし始めた。ヌラ平を含む青森市雲谷財産区創立五〇周年を記念する歴史編纂誌『おやすの里』にはヌラ平について次のような記述が見られる。

ヌラ平という索漠たる地に七ヶ年入植したという魂は引揚者二十二戸の団長宮川福次の中国陝西省延安に於ける中国共産党毛沢東主席によって設立された日本労農学校校長野坂参三の訓導によるところが大きく、日本再建を目的に民主的精神のもと民衆に奉仕し、異常なまでの同志的団結をして、粗末な衣食住に甘んじ耐え指導者同僚を信ずる所謂毛沢東思想を、信奉仕したことによりこのヌラ平における共同経営ぶりは開拓の鑑として全国的に注視を浴びたものである。

「全国的に注視を浴びた」とある通り、入植から約一年を経たこの開拓村の様子を『アサヒグラフ』一九五四年七月七日号は、「引揚者の道険し——唯一の集団農場」という見出しのもとに見開きで紹介している【図7】¹⁰。掲載された写真の中には働き盛りの年齢の男性たちが作業に従事する姿や自分たちで作ったという「八



図7 「引揚者の道険し」『アサヒグラフ』
1954年7月7日号 4-5頁

「甲田節」に合わせて老若男女が輪になって踊る様子が見られ、集落全体に漲る活気を感じ取る事ができる。

しかし最初の数年は、「同志的団結」によって気力で凌いだ過酷な環境での生活も、想定以上の年月を費やすこととなった土地基盤整備作業や冷涼な気候が妨げとなつて一向に展望の開けない農業、酪農の運営が重荷となり、入植五年目を過ぎた頃から続々離村者が始まる。小島一郎がヌラ平を撮影したのは、入植から六年が経過していた時期で、資料が伝えるには、その頃この開拓村で生活を続けていた世帯の数は、入植当時の半分以下九戸ほどまでに減つていた¹¹。

アルバムの中の小島の写真は、集落へと続くぬかるみのような山道だけをフレームに収めたカットに始まり、開拓村の敷地の入り口付近から遠巻きに捉えた集合住宅の大きな建物、そして中年の男女や子供たちが四―五人で脱穀作業に勤しむ姿が続いている。その日小島は、青森市内からヌラ平まで、片道二〇キロ余りの道のりを歩いてこの村に辿り着き、ここで一夜を過ごしたのだろう。写真は夕暮れまで続く農作業の風景の後に、ランプの灯りがともる室内の様子へと移っている。ランプの下に置かれたちゃぶ台を囲み、夕飯を食べながら、書類を広げて何かを話合っているような数人の男性、また別の写真ではランプの下に眠る子供の傍で縫物をする女性など、ランプの灯を中心にした村人たちの夜の営みを追った写真が続く。その後で、写真は朝の場面へと転じている。向日葵を前景に朝日を浴びた集合住宅の外観、そして窓から差し込む光の中で朝餉を準備する一人の女性や、机に向つて書き物をする一人の男性といった朝の光に浸された屋内外の風景の写真でこのシリーズは終わっている。そこには、かつて『アサヒグラフ』が伝えた活気や賑わいとは対照的な、寂寞かつ閑散とした集落の様子が克明に写し

出されている。

生前に陽の目をみることの無かったこの一連の写真を、小島がどのような経緯や意図で撮影したかについては、今となっては推測の域を出るものではない。入植当初に「全国的に注視を浴びた」この開拓村の「今」が気になり、二日間にわたって密着取材した成果を、ルポルタージュのような組写真で、雑誌媒体等に発表する機会を探していたのかもしれない。

小島が撮影をした翌年の一九六〇年、細々と存続していた残りの世帯すべてがヌラ平での暮らしに見切りをつけて、近隣の雲谷山吹地区に移住することとなった。現在、同地は採草地として利用され、ヌラ平という当時の地名は地図上には残されていない。消えゆく寸前の集落に暮らす人々の秋の一日をとどめた小島の写真は、戦後、約七年間のみ存続した開拓村の数少ない記録の一つとなっている。

三 川村勇（一九二五―）の六ヶ所村開拓写真

青森県下北半島の基部に位置し、東を太平洋に臨む六ヶ所村は、県内でも有数の多雪地帯で、夏にはヤマセと呼ばれる偏東風の影響から日照時間が少なく、低温多雨。農耕に向かず、往時より土地の利用に乏しい地域だ。その六ヶ所村倉内芋ヶ崎地区に、山形県庄内郷から開拓団が入ったのは、終戦から約二年後のことである¹²。一九四七（昭和二二）年に先遣隊が入り、翌年には、佐藤繁作団長を中心とした計六五戸の開拓村がこの地に作られた。この開拓団の成り立ちには、ヌラ平の開拓団と同様、満蒙開拓時代にまでさかのぼる。山形県二市三郡から成る庄内郷開拓団は、日本で最初に作られた分郷開拓団の一つで、当時二〇代の佐藤繁作は、その青年団長をつとめた人物だった。終戦後、佐藤団長は、生き残

りの団員を引き連れて日本に帰ってきたが、故郷の山形に安住の地を見つけることはできず、団員とともに六ヶ所村に新天地を求めることになった。大戦を挟む約一〇年にわたり、大陸と日本で、多くの苦勞を共にした経験は、この開拓団の結束を強靱なものにしていた。

開拓民は入植と同時に、共同体の営農と生活の基盤となる農業協同組合を結成するのが一般的で、庄内¹³にも早々に開拓農協が組織された。その農協に、川村勇という職員がいた。川村が庄内の開拓村に移り住んだのは、一九五五（昭和三〇）年四月。村は入植から八年が経過していた。鉱山での勤務、入隊、代用教員など、戦前から戦後にかけての激動の時代を生きながら、カメラを唯一の趣味とし、お金のない時は、手作りのカメラで撮影を続けるほど写真に熱中していた川村は、ある時佐藤団長から、馬鈴薯の冷害の惨状を訴えるための写真を撮ってほしいと依頼される。それがきっかけとなり川村は、一九六二（昭和三七）年に離村するまでの約七年間にわたり、仕事の合間を見つけては村の様子を撮り続けた。

川村が滞在していた時期の庄内は、昭和二〇年代末の大冷害を受けて、畑作主体から酪農への転換期にあった。農協の職員として川村は、馬鈴薯、菜種、デントコーンなど、さまざまな耕種農業の試みや【図8、9】、乳牛の導入など、営農における出来事を写真に残す一方で、ランプの灯る部屋での家族の団欒【図10】、演芸会の練習、嫁入り【図11】、墓参りなど、村人たちのハレとケ、双方にわたる日々の営みをもくまなく写した。

独学で写真の技術を身につけた川村だが、他の地方アマチュア写真家の例に漏れず、当時隆盛期にあったリアリズム写真運動の波を一身に受けた一人であった。特に木村伊兵衛に強い憧れを抱いており、



図9 川村勇 馬鈴薯の収穫
1955-62年 個人蔵



図8 川村勇 開墾作業
1957年頃 個人蔵



図10 川村勇 いろいろとランプの生活
1955-62年 個人蔵



図11 川村勇 山形の風習「嫁ぶれ」
1955-62年 個人蔵



図12 川村勇 農作業の合間の授乳
1955-62年 個人蔵

巨匠が撮影会のため十和田湖を訪れた時は、その技を盗もうとぴったりと側について歩いたという。なるほど、豊かな自然の中で無邪気に遊ぶ子供たち、額に汗して働く男、満面の笑みで収穫を歓ぶ農婦、農作業の合間に授乳するたくましい母の姿など【図12】、川村の写真が描き出す農村社会の牧歌的な様相は、木村伊兵衛が一九五〇年代から二〇年以上通い詰めて撮影した「秋田」のシリーズを想わせる。

同時代のアマチュア写真家たちがそうしていたように、川村もまた腕試しに地方の新聞やカメラ雑誌の投稿欄に写真を応募し、入選の実績を重ねていたところをみると、本人が自らの写真に「作品」的価値を見出していたことは間違いない。一方で、家族同然に付き合っていた被写体となった村人たちにとって、それらは良質な記念写真となることを知っていたので、プリントは多めに焼いてなるべく被写体となった人々に分け与えていた。そのため写真家自身は、村を離れる際の引越しのどきどきで、当時のネガやプリントの多くを失っているにも関わらず、村人の手元には多くの写真が残され、それらはこの開拓村の記憶の継承において大きな役割を果たすことになった。

一九七七（昭和五二）年、庄内開拓の入植三〇周年を記念して発行された『入植三十周年記念誌 挑開拓三十星霜』¹⁵には、「三十周年想い出写真集」というタイトルのもとに、川村の写真が多数編まれている。また、この頃から庄内酪農農業協同組合は、『目で見る庄内開拓史』と銘打ち、川村のプリントや入植第一弾のメンバーの肖像写真を貼付けた大きなアルバムを作成していた【図13】。さらに一〇年が経過し、入植四〇周年の折、三〇周年記念誌に載せた写真が好評だったため、記念誌に加え、『拓跡』と題された四六ページの写真集が発行された。その巻頭で、川村と親しかった土田浩は「此の生きた写真の多くは当時職員だった川村勇君が撮ったものであるが、今日では想像出来ない頃のことだけに彼の技術の良さは勿論のこと、移り替る四季の中に拓かれる生命を追い続ける執念が写真にのり移っているとしか思われない」¹⁶と、友人が残した写真の魅力を熱く語っている。「開懇」、「ナタネ、馬鈴薯、雑穀」、「生活」、「酪農の始まり」と章立てしながら、川村の数々の写真を掲載したこの写真集は、まさに『拓跡』というタイトルどおり、開拓団の足跡をたどるアルバムとなっている。

こうして庄内の「拓跡」として供される時の川村の写真には、一点一点キャプションや解説が付されるのが常だ。例えば、びっしりと雪が凍みついた井戸の写真には「冬の水くみは大変だった」【図14】、初めて室内に電灯がともった瞬間を撮った写真には「電気が灯いた!!（昭和三十二年）」【図15】、それぞれの墓地を決める



図13 アルバム「目で見る庄内開拓史」
らくのう青森農業協同組合蔵

べく村人たちが手作りの供養塔を原野に立てる様子を撮った写真には「我が家の墓地はここです」など。被写体の声として響くこれらのテキストは、ともすると木村伊兵衛調の「作品」になりたがる川村の写真から、入植以来の苦難に満ちた道のりを生々しく呼び起こす。

その後、五〇周年、六〇周年と続く記念誌の中では、在住の人たちが撮った写真の割合が増え、川村の写真は数える程度にしか収められていない。ただし、盛大に行われた五〇周年記念の際は、丘陵地で鋤を振り上げて切り株を掘り起こす農夫を捉えた、開拓の象徴ともいえる川村の写真がテレフォンカードにしたものが、記念品として皆に配られている【図16】。二〇一八年に庄内地区は、開拓七〇周年を迎えた。少子高齢化による後継者



図15 アルバム
「目で見る庄内開拓史」より



図16 入植50周年記念に庄内酪農農業協同組合が作った
テレフォンカード



図14 『入植四十周年記念
「写真集」拓跡』
(庄内酪農農業協同組合
1988年)より

不足が大きな課題となっているが、入植から続く家系の三世などが中心となり、酪農を軸に村を存続させている。

『拓跡』の中で、入植三代目の伊藤和夫はこう語っていた。

現在のようないんformation時代は、経験を誇る語り部を必要としないのですが、余りにも多すぎる過去、現在、未来に至る情報はとても吸収できるものではありません。消去法により次々と入れ替ええないとついでいけない時代です。(….)この写真は、私達の歩みを確認できるものです。これからも今迄同様に誇れる庄内を、築いていきましょう¹⁷。

一九六〇年代末に始まる六ヶ所村を中心とする大規模臨海工業地帯の建設を目的とした「むつ小川原開発」。それにもなうブローカーによる土地の買い占めは、庄内のような戦後の開拓集落を狙い撃ちした¹⁸。開拓集落は在来集落に比べて、広い土地を所有しながら、度重なる冷害や農政の失策により経営に行き詰まり、多額の負債を抱えている場合が多かった。見込んでいた地価の五倍から一〇倍の値で交渉してくる土地ブローカーの話は、生活に困窮する開拓農家の人々にとって、渡りに船の申し入れだった。そのような状況下で、自らの手で切り拓いた土地に留まる意志を保持した庄内の開拓村の人々にとって、入植以来の辛苦の日々の記憶は、開発の波へ抵抗するための精神的砦となっていたに違いない。「この写真は、私達の歩みを確認できるものです。」という伊藤和夫の言葉が示すように、その時、常に入植当時に連れ戻してくれた川村の写真が果たした役割は決して小さいものではなかったと考えられる。

四まとめ

一九五〇年代後半というほぼ同時期に、同じ青森県内で戦後の緊急開拓地の様子をカメラに収めていた小島一郎と川村勇。前者は取材を目的としたわずか二日ばかりの来訪者であり、後者は開拓地に暮らす当事者であったがゆえに、被写体に向かう立ち位置は自ずと異なる。また、小島が訪れたヌラ平は数える程の世帯を残す風前の灯火の開拓集落であったのに対し、川村が撮影したのは、今日まで続くような耐久力を具えた開拓団が暮らす土地であった。しかし状況は違っていて、二人が写し出す開拓地の風景には共通する要素もいくつか見られる。茫漠とした大地を相手にした労働、馬力に頼った農耕、そしてランプの灯火による夜の生活、こうした素朴な生の営みは、戦前の日本の植民地での開拓民らの体験を彷彿とさせるがゆえに、高度経済成長期という当時の状況下にあつては、アナクロニスティックな風景であるとも言える。既に述べたように戦後の開拓事業は全国規模で展開されたものであるから、同事業が始まる終戦後まもない時期から終了となる一九七〇年代の半ばにかけて、こうした前近代的風景が全国各地に点在したであろうことは想像に難くない。この推測を助ける青森県外の事例の一つとして、最後に岩手県の戦後開拓の地を撮った一冊の写真集について触れたい。

その写真集は青山学院大学写真部が共同製作として行った活動を一冊にまとめたもので、『岩手山麓戦後12年目の開拓村をみる』というタイトルで一九六〇年一月に刊行されている。¹⁹【図17】。青山学院大学写真部の部員らが一九五七（昭和三二）年から翌年にかけて二年三ヶ月にわたって開拓村に通い、時には村人と寝食を共にしながら撮影した写真が、開拓村の営農形態に分けて編まれたもので、社会的視点からの考察も含んだルポルタージュ的性格の強い写真集となっている。彼らが取材に入った岩手



図 17 青山学院大学写真部共同製作による写真集
『岩手山麓 戦後 12 年目の開拓村をみる』
(1960 年) 中 タイトル頁

山麓の開拓村もまた満州やその他の外地からの引揚者が入植者の多くを占め、中にはヌラ平のように中国共産党下での教育に従って集団農場の生活を続けている集落も含まれている。青山学院大学写真部が取材に入るのは、入植が開始されてから約一〇年が経過した時点で、その頃には当初四万戸を数えた入植者の数は四分の一まで減っていたと言う。最初の一〇年間の暗黒模索を乗り越えて、ある程度軌道に乗った開拓の営みとは言え未だ厳しい暮らしぶりを伝えるこの本に編まれた写真では、原野での根株の掘り起こし作業【図18】、雪で覆われ凍みついた井戸【図19】、馬を使った農耕作業、ランプの下での生活など【図20】、小島一郎や川村勇の写真にも見られた同じような場面がくり返されていることに気づく。

出された戦前の開拓村が、戦後、日本の山野に場所を移し、高度経済成長期の陰で続いていたことを伝えている。こうした戦後の開拓地の中には、その過酷な環境による人々の生活の不安定さゆえに、道場親信が「戦後開拓と農民闘争——社会運動の中の「難民」体験」の中で指摘するように、やがて、基地



図 18 『岩手山麓 戦後 12 年目の開拓村をみる』
「集団農場」の章から開墾 (22-23 頁)



図 19 『岩手山麓 戦後 12 年目の開拓村をみる』
「散在部落」の章から冬の生活 (8-9 頁)



図 20 『岩手山麓 戦後 12 年目の開拓村をみる』
「散在部落」の章からランプの生活 (16-17 頁)

の（茨城県百里基地）、空港の（千葉県三里塚）、核燃料サイクル施設の（青森県六ヶ所村）、オウム真理教教団施設の（山梨県上九一色村）の用地買収の標的となり、大きな社会運動の現場となったものもあった²⁰。「戦後開拓」は「帝国」が「国民国家」の衣装をまとうために偽装された国内植民地だったのかもしれない²¹。道場はいみじくもこう語っている。

小島一郎、川村勇、そして青山学院大学写真部の部員らが撮った写真は、空港の滑走路や核燃料サイクル施設の下で土塊に消えたいくつもの戦後開拓の営みを指し示しながら、今私たちが立つ場所を厳しく問い続ける。

- 1 宮本常一『私の日本地図 3 下北半島』同友館、一九六七年、二二四頁
- 2 大邑登喜夫『野平物語』大邑登喜夫（私版）、一九九九年、一四二―一四三頁
- 3 青森県農林部農地調整課編『青森県戦後開拓史』、一九七六年、五頁
- 4 「写真一〇〇年——日本人による写真表現の歴史展」は一九六八年から翌年にかけて東京の西武百貨店を皮切りに、名古屋、大阪、新潟に巡回した。
- 5 内藤正敏「北海道開拓時代と記録写真」『世界』一九六八年二月号、二六三―二六五頁。「私説・田本研造論」『季刊写真映像』一号、一九六九年、一六四―一七〇頁。
- 6 「津軽」と題された小島一郎の初個展は一九五八年六月六日―十一日にかけて、東京銀座の小西六フォトギャラリーで開催された。リーフレットはこの会場で配布されたもので、小島一郎のあいさつの言葉と名取洋之助の言葉が併記されている。
- 7 『カメラ毎日』一九五六年二月号の「新人の場」に小島一郎が下北で取材した写真と共に紹介された記事の中で、写真家のコメント欄に「スナップより造型美でゆきたい」という言葉が見られる。
- 8 小島は『カメラ毎日』一九六三年九月号「わたしの技法 39 津軽野——夏から冬まで」の中で、この「印画の整理アルバム」に触れ、「私はシャッターをきったものは、全部名刺判に引き伸ばして整理している。密着焼きでもよいのだが、私の写真には、焼き込みなどするものが非常に多いため、どうしても引き伸ばしてみなければその感じがよくわからない。」と語っている。
- 9 雲谷財産区史編纂委員会『雲谷財産区史「おやすの里」』青森市雲谷財産区、二〇〇五年、二九五頁
- 10 『アサヒグラフ』一九五四年七月七日号、四―五頁

11 前掲『青森県戦後開拓史』、三七〇頁

12 六ヶ所村倉内芋ヶ崎地区庄内における開拓の歴史については前掲『青森県戦後開拓史』、四六三頁―四七八頁を参照した。

13 ここでは庄内開拓団が定住した六ヶ所村の特定の地域を指すために、開拓団や周辺地域の人々によって慣習的に用いられた「庄内」という呼称を用いる。

14 『カメラ毎日』一九五六年一〇月号では、密着焼の部門で、佳作に《子供の世界》が、組写真の部門においては三等に《愉快な将棋》が入選。また同誌の一九五六年一二月号では、密着焼の部門で二等の《花火》、佳作の《開拓地にて》、第三次審査をパスした《葉脈》と三点の作品が入選している。

15 庄内酪農農業協同組合による発行。

16 村井正昌、星川和夫編『拓跡』庄内酪農農業協同組合、一九八八年、一頁

17 同前書、二六頁

18 「むつ小河原開発」による六ヶ所村の開発の経緯については以下の文献を主に参照した。六ヶ所村文化財審議委員会編『六ヶ所村戦後開拓史巻1 ―千歳・庄内開拓地区―』六ヶ所村教育委員会、一九七九年。鎌田慧『六ヶ所村の記録』上・下、岩波書店、一九九一年。船橋晴俊、長谷川公一、飯島伸子編『巨大地域開発の構想と帰結 むつ小川原開発と核燃料サイクル施設』東京大学出版会、一九九八年。

19 一九五八年七月には東京・銀座の小西六フォトギャラリーで写真集と同じタイトルの写真展が開催されている。また青山学院大学写真部のこの岩手山麓開拓村のドキュメンタリーの仕事に対して昭和三四（一九五九）年度第五回毎日写真賞特別賞が授与されている。

20 道場親信「戦後開拓と農民闘争―社会運動の中の「難民」体験―」『現代思想』二〇〇二年一月号、二二二―二三九頁。

21 同前書、二三六頁。

附記 本稿は、拙稿「開拓の地層 ―六ヶ所村開拓写真が問うもの」『photographers' gallery press no. 7』(photographers' gallery、二〇〇八年、二二二―二二七頁)を改稿したものである。